

★在満日本人の生活・文化を伝える幻の雑誌、ついに復刻!!

一九三三年に『月刊撫順』から改題され、終戦直前まで刊行された『月刊満洲』。その内容は時局に関する評論やプロパガンダに限らず、漫画や詩歌、満洲各地での見聞やゴシップなど、幅広いジャンルの記事がふくまれる。執筆陣もまた、満洲国官吏、南満洲鉄道株式会社社員、軍人、医者といった満洲国上層部やエリートに加えて、一般市民や女学生、カフェー女給など様々な階層と職業におよぶ。

満洲国研究のみならず、文化史、メディア史、ジェンダー史、観光史、芸術史の分野で幅広く活用されることを期待するものである。



満洲月刊

復刻版

全4回配本・全11巻・別冊1

解説—岡村敬二（京都ノートルダム女子大学名誉教授）
 田島奈都子（青梅市立美術館学芸員）
 推薦—高媛（駒澤大学教授）
 収録—『月刊満洲』第六巻第九号（一九三三年九月）
 第一六巻第四号（一九四三年四月）※一部欠号あり

『月刊満洲』の表紙画には竹中英太郎（1906-1988年）や池辺貞喜（1905-1994年）を起用。異国情緒に溢れるすぐれた作品を生み出した。

不二出版

復刻版 月刊満洲

全4回配本・全11巻・別冊1

揃定価 365,200円
 (揃本体332,000円+税10%)

解説：岡村 敬二（京都ノートルダム女子大学名誉教授）
 田島 奈都子（青梅市立美術館学芸員）
 推薦：高媛（駒澤大学教授）
 体裁：A4判・4面付・上製・総約4,400頁(原誌約17,000頁)
 別冊：解説(岡村敬二・田島奈都子)・総目次・索引
 A5判・並製・総約250頁 第4回配本に付す
 ※分売可。定価2,200円(本体2,000円+税10%)
 ISBN978-4-8350-8628-6



原本提供：函館市中央図書館、神奈川県立図書館、東京大学明治新聞雑誌文庫、
 神奈川県立近代文学館、岩手県立図書館

●収録内容・配本予定

配本	刊行予定	復刻版巻数	収録巻号(発行日省略)	値段	ISBN(978-4-8350)
第1回	2026年5月	第1巻	第6巻第9号(1933年9月)―第7巻第4号(1934年4月)	揃定価66,000円 (揃本体60,000円+税10%)	8612-5
		第2巻	第7巻第5号(1934年5月)―第7巻第11号(1934年11月) ※第7巻第12号は刊行無し		
第2回	2026年7月	第3巻	第8巻第1号(1935年1月)―第8巻第8号(1935年8月)	揃定価99,000円 (揃本体90,000円+税10%)	8615-6
		第4巻	第8巻第9号(1935年9月)―第9巻第4号(1936年4月)		
		第5巻	第9巻第5号(1936年5月)―第9巻第12号(1936年12月)		
第3回	2026年10月	第6巻	第10巻第1号(1937年1月)―第10巻第6号(1937年7月) 日本版第1号(1937年8月)―日本版第2号(1937年9月) ※第10巻第7号は欠	揃定価99,000円 (揃本体90,000円+税10%)	8619-4
		第7巻	第10巻第8号(1937年10月)―第11巻第6号(1938年6月)		
		第8巻	第11巻第7号(1938年7月)―第11巻第12号(1938年12月)		
第4回	2027年1月	第9巻	第12巻第1号(1939年1月)―第12巻第9号(1939年9月) ※第12巻第7号は刊行無し、第12巻第10号は欠	揃定価101,200円 (揃本体92,000円+税10%)	8623-1
		第10巻	第12巻第11号(1939年11月)―第14巻第11号(1941年11月) ※第13巻第1―6号、第13巻第8―9号、第13巻第11号―第14巻第4号、第14巻第6号は、第14巻第12号は欠		
		第11巻	第15巻第1号(1942年1月)―第16巻第4号(1943年4月) ※第15巻第6―8号は欠		
		別冊	解説、総目次・索引		

※収録内容は変更となる場合がございます

お薦め先：日本近現代史、満洲国史、植民地史、社会史、ジェンダー史、文学史などの研究者。大学・公共図書館

振替 東京都区水道2-10-10
 003598116694708544
 00160829408544
 不二出版

『月刊満洲』の復刻に寄せて

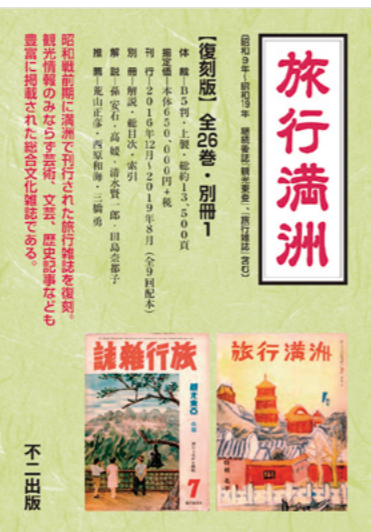
岡村敬二

『月刊満洲』は、一九二八（昭和三）年創刊の『月刊撫順』を一九三三（昭和八）年に改題し、一九四五（昭和二〇）年まで一七年間にわたって刊行された満洲の大衆誌である。そのほとんどの期間を、城島舟礼（城島徳寿、一八九三—一九四四年）が編輯した。ほとんどというのは、新京日日新聞の社長に就任した翌年の一九四〇（昭和一五）年三月からの号分と、舟礼死去の一九四四（昭和一九）年六月からの約一年は、養子である城島英一が発行したためである。舟礼は撫順炭鉱庶務課で『炭の光』の編集を二年ほど担当した。退社後の『月刊撫順』創刊の際は、この人脈を活用して、撫順の南満洲鉄道株式会社（以下満鉄）関係者を読者基盤とし、満鉄本社の役職者や病院・学校・図書館などに寄贈、満鉄沿線の駅待合に備え付けるなど販路獲得に目配りし、『月刊撫順』は最高で四七〇〇部、『月刊満洲』は最盛期には数万部発行された。この販売手法は見事というほかない。

『月刊満洲』は舟礼の「個人的趣味」の勝った雑誌であったが、「ひたむきに大衆へ」を目指した、満洲の知識を身につけるのに最適な「物知り雑誌」であった。「原稿募集」はこの性格を顕著に現しており、例えば『月刊満洲』第七巻第二号（一九三四年二月）には、「日満親善美談紹介」、「第一線便り（軍・警・満鉄社員・満洲国官吏・武装移民・その他一般農工商業者などの消息）」、「旅館・食道楽・カフェなどの評判記」をはじめ、各方面のゴシップや紀行文、漫画や詩、短歌、俳句、川柳などが募集された。舟礼は関東軍や満洲国上級官僚、満鉄社員や国策会社、協和会など各界上層部の原稿を掲載して「誌価」を高からしめ、そのいわば「お墨付き」をもって、各地のゴシップや通俗的な記事などを自在に掲載し、各種各層の記事も載せていこうとしたのである。

わたしは以前、遼寧省図書館蔵の雑誌を閲覧し、『月刊撫順』昭和四年四月号（一九二九年四月）から、『月刊満洲』第一八巻第五号（一九四五年五月）まで、多くの欠号はあったがその「目次一覧」を作成し「解題」を書いた。この度の復刻は、日本国内で所蔵されている一九三三年九月から一九四三年四月までの号を収めている。本誌の復刻によって満洲・満洲国期の出版史や文化活動の一端が明らかになることが期待できるかと思う。

（おかむら・けいじ 京都ノートルダム女子大学名誉教授）



復刻版 旅行満洲

全9回配本
全26巻・別冊1

●昭和戦前期に満洲で刊行された旅行雑誌を復刻。観光情報のみならず芸術、文芸、歴史記事なども豊富に掲載！

解説 高媛駒澤大学教授
田島奈都子（青梅市立美術館学芸員）
岩間一弘（慶應義塾大学教授）
体裁 B5判・上製・総約一三、五〇〇頁
価格 揃定価七五、〇〇〇円
（揃本体六五、〇〇〇円＋税一〇％）
※分売可 定価三三、〇〇〇円
※分売可 定価三三、〇〇〇円
（揃本体三〇、〇〇〇円＋税一〇％）
『旅行満洲』は一九三四年六月にジャパン・ツーリスト・ビューロー大連支部より刊行された旅行雑誌である。その内容は多様で、巻頭には毎号一〇頁程のグラビア頁が設けられ、観光地案内、宿泊施設、土産、時刻表などの観光情報はもちろんのこと、スキーや狩猟、温泉などのレジャー情報も豊富である。また、漫画や文芸作品、芸術、歴史に関する記事も多く掲載されており、総合文化雑誌としての側面も強い。創刊号を含む本誌の大部分を復刻刊行し、通覧可能とすることで満洲の世相や文化、また戦時下の観光の実態、その変化を知るための重要資料として提供する。

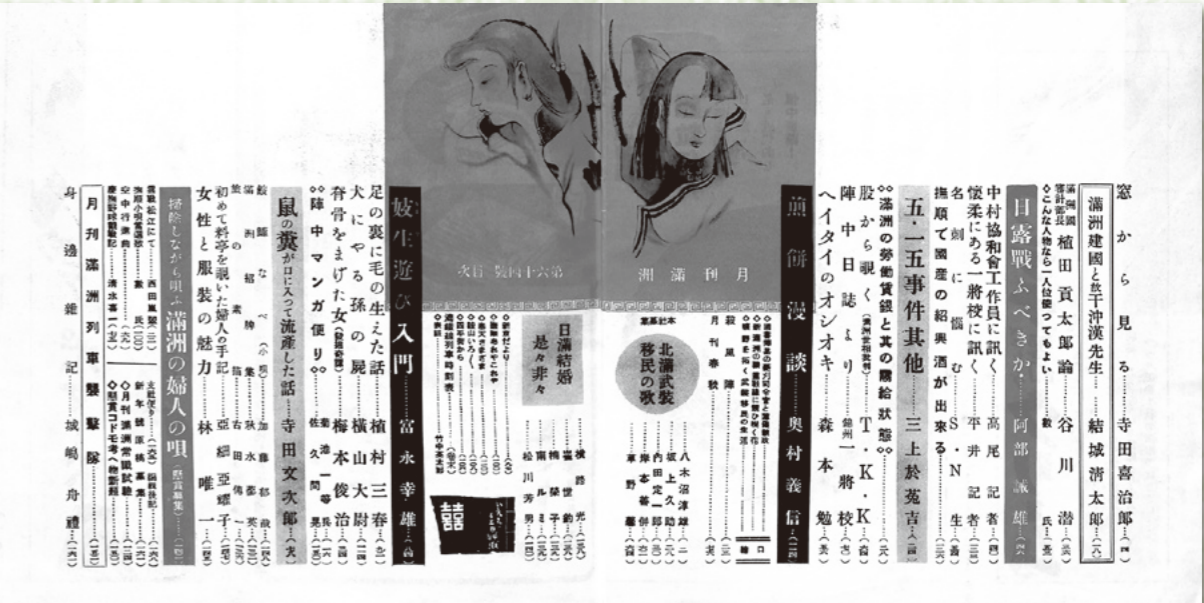


復刻版 華文大阪毎日

全6回配本
全18巻・別冊1

●日中戦争期において、驚異的な販売部数を維持した総合誌、『華文大阪毎日』。当時の社会、文化、文芸を生き生きと伝える幻の資料、復刻！

監修 岡田英樹（立命館大学名誉教授）
解説 岡田英樹・関智英・津田塾大学教授・羽田朝子（東洋大学教授）
目次・索引 牛耕耘 東京都立大学助教
別冊 解説／総目次／索引 約三八〇頁
※分売可 定価三三、〇〇〇円
（揃本体三〇、〇〇〇円＋税一〇％）
※分売可 定価三三、〇〇〇円
（揃本体三〇、〇〇〇円＋税一〇％）
『華文大阪毎日』は、大阪毎日新聞社・東京日日新聞社が中国語圏に向けて発行した、中国語による総合雑誌（一九三八—一九四五年）である。中国大陸の一般市民を読者とした本誌は、中国語による大日本帝国の国策プロパガンダの一端であると同時に、一般読者の声を広く取り入れ、多彩な誌面を展開した。日中の文学者、政治家、文化人、行政官らの作品や情報、さらには中国各地の風俗、生活をも伝える豊富なグラビアを掲載する。最盛期には七万部を超えたという本誌は、中国近現代史の空白を埋める基礎資料として、広く植民地期中国語文化圏に関心をもつ研究者の方々にご利用いただきたい。



▲第6巻第9号(1933年9月)目次(復刻版第1巻収録)



復刻版 海の外

全3回配本
全7巻・別冊1

●大正期から昭和戦前期日本の海外移住の実態を克明に記した稀有な雑誌『海の外』。「移民先進県」長野のみならず、日本における「移民の原点」を伝える幻の資料を復刻！

編集 森武磨（橋大学名誉教授）
体裁 B5判・三面付・上製・総約一二五〇頁
価格 揃定価二四、五〇〇円
（揃本体二二、五〇〇円＋税一〇％）
『海の外』は一九二二年四月から一九四三年五月まで刊行された、信濃海外協会の機関誌である。一九一〇年代から海外移民の推進のために、各府県で海外協会が設立された。そのなかでも信濃海外協会を擁する長野県は、最も多くの満洲移民を送出した県として有名であろう。同県は一九二〇年代からブラジルへの移民に熱を注いでおり、他県の範となるほどのものであった。本復刻版には、一九四四年七月創刊の後継誌「信濃開拓時報」も収録。終戦間際の一九四五年五月まで刊行されており、戦局が厳しくなるなかでの移民事情を伝える貴重な資料である。別巻として森武磨「満洲移民とブラジル移民」信濃海外協会『海の外』を対象として一附『海の外』総目次・索引」を附す。



復刻版 満洲武装移民関係資料

全3冊

●満洲移民のなかでも、初期の試験移民期（一九三二—一九三五年）とされる時期の移民の状況や、関東軍の思惑を伝える資料を復刻。武装移民から大規模農業移民への重要な転換点を明らかに！

編 解説 森武磨（橋大学名誉教授）
体裁 B5判・上製・総約一、二五〇頁
価格 揃定価八三、六〇〇円
（揃本体七六、〇〇〇円＋税一〇％）
五族協和・模範の開拓地建設という「理想」と、現地住民との対立・過酷な気候という現実。満洲移民は在郷軍人による武装移民から試験的なものとしてはじまったが、多くの離脱者、死亡者を出すこととなった。試験移民期（一九三二—一九三五年）の武装移民がおかれた苦境に寄り添い、現状を鋭く批判した永田桐の収集による「満洲移民参考資料」から、武装移民に関する資料や、以降の大規模農業移民への重要な転換点となった「移民会議」の史料を整理し、「屯墾移住地視察報告」などの翻刻、森武磨による解説を附して刊行する。日本近現代史、満洲移民史のみならず、ひろく移民史、農業史、植民地史の研究にご活用いただきたい。

本書の特徴

- 一九三三年から一九四三年まで、激動の時代の在満日本人の生活・文化を伝える。
- 執筆陣は官公庁の人物に限らず、開拓団民や都市住民、女学生、カフェー女給などさまざまな階層と職業におよぶ。
- 女性たちを集めた座談会やエッセイなど、外地における女性の姿や声を多数掲載。ジェンダー史、メディア史研究にも必須の資料といえよう。



▲第16巻第1号(1943年1月)目次(復刻版第11巻収録)

満洲旅行界に生きる人々の息吹を伝える総合大衆誌

高媛

一九二八年八月（一説では七月）、『月刊満洲』の前身である『月刊撫順』は炭坑の町・撫順に誕生した。当初は主に地元撫順の情報や広告を掲載していたが、一九三三年に『月刊満洲』と改題される。第一〇巻第一〇号（一九三七年二月）からは、編集部が首都・新京に移転し、徐々に「満洲国国民誌」の貫録をみせはじめた。発行部数は、一九三〇年一月には三千五百部であったが、一九三八年二月には自称三万部にまで増大し、満洲屈指の総合大衆誌としての地位を確立した。

満洲旅行界が専門の筆者が『月刊満洲』に注目してきた理由は、満洲旅行界の中心人物が、執筆陣として多数名を連ねていることである。とりわけ、南満洲鉄道株式会社（以下満鉄）旅客課の加藤郁哉（ペンネーム、今枝折夫）と満鉄弘報課の石原秋朗（ペンネーム、石原巖徹、石敢当、青龍刀）の活躍が目覚ましく、加藤の「満洲特殊風致区案内」と石原の「雑談支那」という人気連載は、のちに月刊満洲社から単行本『満洲異聞』（一九三五年）と『雑談支那』（一九三六年）として刊行され、ベストセラーとなった。また、新京公会堂書記長で、大連市囑託をも務める真殿屋磨（ペンネーム、木南人）が執筆した「全満観光バス行脚」の連載も、読み応えのある歯に衣せぬバス会社への批判が好評だった。ほかにも、『月刊満洲』には満洲の観光宣伝に関する記事が数多く掲載されている。その高い貢献度が認められ、満洲観光連盟は「御褒美」として、同誌第一二巻第一〇号（一九三九年一〇月）に附録の絵葉書を寄贈した。

『月刊満洲』は、満鉄の統計資料や公式ガイドブックからは窺い得ない、満洲旅行界に生きる人々の息吹を伝えている。旅行界のみならず、当時の満洲の空気を肌で感じるためにも閲読を強くお勧めする。

（こう・えん 駒澤大学大学院教授）

日本版の創刊を祝す

関東軍参謀長 陸軍中將 東條英機

東條英機は、我が國に於ける今日の大動向を、新聞に著目と一紙して見ると、必ずしも、満洲に於ける人々の動向を正確に把握することは出来ぬ。我が國の目的は、五ヶ年を要するところを、その五分の一の一〇年で成し遂げようとする。満洲に於ける人々の動向を正確に把握することは出来ぬ。我が國の目的は、五ヶ年を要するところを、その五分の一の一〇年で成し遂げようとする。



この時、我が國は、満洲に於ける今日の大動向を、新聞に著目と一紙して見ると、必ずしも、満洲に於ける人々の動向を正確に把握することは出来ぬ。我が國の目的は、五ヶ年を要するところを、その五分の一の一〇年で成し遂げようとする。

▲東條英機「日本版の創刊を祝す」第10巻第6号（1937年7月、復刻版第6巻収録）
『月刊満洲』日本版の刊行に際して寄せられ、『月刊満洲』の性格、軍部が分かる。

趣味と実益を兼備せるその独創的編輯 ——板垣征四郎
満洲国国民誌！ ——城島舟礼

いとしかかれらよ



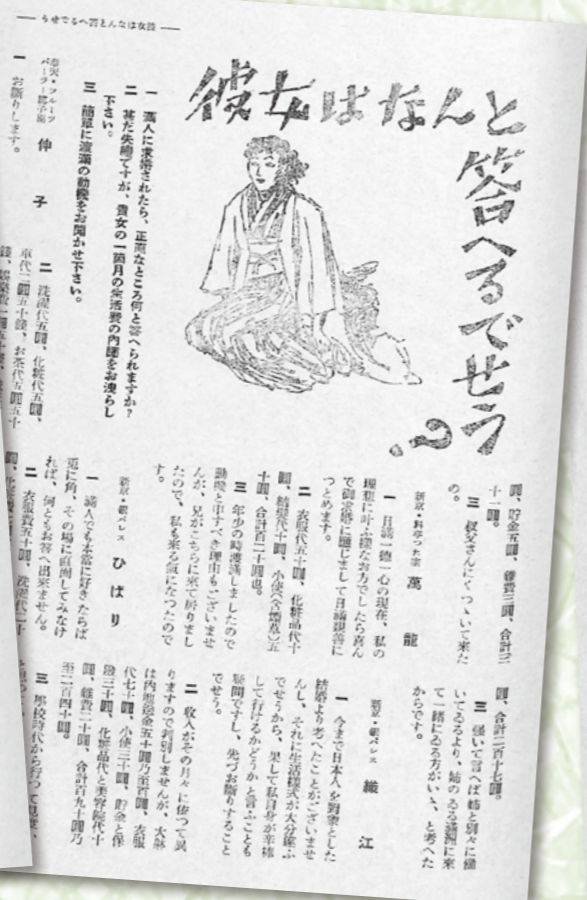
▲「ミス満洲と軍用犬」第7巻第5号（1934年5月、復刻版2巻収録）



▲「いとしかかれらよ」第9巻第4号（1936年4月、復刻版4巻収録）



▲「彼女はなんと答へるでせう？」第10巻第8号（1937年10月、復刻版第7巻収録）
『月刊満洲』には満洲で働く女性たちの記事も数多く掲載されている。本記事における「満人に求婚されたら」への回答では、「国際結婚は大嫌ひ」「満人にも、上・中・下とありますわ、でもヤツパリいくら上でも駄目」のように20人中9人が否定的であり、「日満一体」に対する本音がうかがえる（肯定的解答8名、不明3名）。



▲「彼女は何と答へるでせう？」第10巻第8号（1937年10月、復刻版第7巻収録）
『月刊満洲』には満洲で働く女性たちの記事も数多く掲載されている。本記事における「満人に求婚されたら」への回答では、「国際結婚は大嫌ひ」「満人にも、上・中・下とありますわ、でもヤツパリいくら上でも駄目」のように20人中9人が否定的であり、「日満一体」に対する本音がうかがえる（肯定的解答8名、不明3名）。



（右）奉天新鋭漫画集団 同人合作「輯輯漫画 戦捷春」第11巻第4号（1938年4月、復刻版第7巻収録）
（左）新興漫画協会合作「漫画セクション」第9巻第8号（1936年8月、復刻版第5巻収録）



（右）奉天新鋭漫画集団 同人合作「輯輯漫画 戦捷春」第11巻第4号（1938年4月、復刻版第7巻収録）
（左）新興漫画協会合作「漫画セクション」第9巻第8号（1936年8月、復刻版第5巻収録）



▲今枝折夫「満洲特殊風致区案内5 国都新京を歩く」第7巻第2号（1934年2月、復刻版第1巻収録）
今枝は新京のほか鴨緑江周辺や奉天、大連を舞台に、会話調で満洲での生活の様子を紹介。のちに『満洲異聞』（1935年）としてベストセラーとなる。

内容見本